NPO法人河北潟湖沼研究所通信

かほくがた

豊かな河北潟に
夢のある干拓地に

田んぼ10年プロジェクト 地域交流会in河北潟

国際的に湿地保全の活動をすすめる団体「ラムサール・ネットワーク日本」により、2013年に立ち上げられた「田んぼの生物多様性向上10年プロジェクト」において、活動のすそ野をひろげるための地域交流会が全国各地で開催されています。昨年11月25～26日には河北潟地域を舞台に開催され、当研究所は共催団体として取り組みました。初日はバスツアーにより、理事長の高橋がガイドを担当して外来植物除去活動や、河北潟干拓地、地形全体が見渡せる内灘砂丘などをご案内しました。夕方からはオプショナルツアーとして、清水や酒蔵を訪ね、地元の文化に触れることができ、参加者の皆さんに大変喜ばれました。2日目は、津幡地域交流センターにて、基調報告3題、事例報告5題と多様な取り組みが発表されました。パネルディスカッションでは、汽水化や流域保全を目指すことについて、発表者の皆様から意見を聞くことができ、会場からは現場のリアルな声が発信されました。湿地と田んぼの生きものの現状、農業の問題、全国的な動き、そして国際的な視点、お互いに情報交換することでまた課題がみえ、パワーの出る地域交流会となりました。

（関連ページ 7）

CONTENTS

田んぼの生物多様性10年プロジェクト
地域交流会in河北潟 1p

河北潟の仲間たち・47
「ウナギ」 2p

エコプロ2017参加報告 3p

河北潟の流域保全に向けて
①長良川視察報告 4p

②福島県視察報告 6p

地域交流会in河北潟報告 7p

お知らせ・活動報告 8p

Vol.23-3
2018年2月11日

第47回　ウナギ

2013年2月1日に発表された環境省第4次レッドリストにおいて、ニホンウナギが絶滅危惧ⅠB類（近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの）に指定されたことは、衝撃的なニュースとして報道されました。全国主要河川における天然ウナギの漁獲量データを基に3世代にわたるウナギの成熟個体数の減少率が72〜92%と算定されたことから、絶滅危惧ⅠB類の基準である少なくとも50％以上の減少が起こっていると推定されたのが、指定の理由となっています。このレッドリストの見直しについては、他の分類群は既に前年に発表されており、汽水・淡水魚類だけが発表が遅れていたもので、ニホンウナギが絶滅危惧種に指定される方向であることは予告されていました。当初の新聞報道では絶滅危惧Ⅱ類とする方向とされていましたが、最終的には、これよりも絶滅の危険性がより高いと評価されたことになります。

さらに2014年にはIUCN（国際自然保護連盟）はニホンウナギを絶滅危惧ⅠB類に指定しました。国際的に保全の必要な種とされたことで、今後ウナギが食べられなくなるのではないかといったことが大きく報道されました。実際には、これらのレッドストには法的な規制はなく、漁獲ができなくなったり食べることが禁止されるといったものではありません。しかし、シラスウナギの不良が続いていることから、減少傾向の継続や絶滅が憂慮される状況となっており、保全のための対応が急務となっています。

動植物の国際的な取引を巡ってはワシントン条約により規制されています。ワシントン条約第17回締約国会議は、2016年9月〜10月に開催されました。ここでは、ニホンウナギの国際取引を制限しようとする提案はなされませんでした。しかし、EUからウナギの漁獲や国際的な取引に不透明な部分があること、また、そのことが世界各地のウナギを絶滅の危機に追い込んでいることが指摘され、ニホンウナギを含むウナギ種の資源や貿易の状況等について研究・評価を行う場を設けることが合意されました。次回は、平成31年にスリランカで開催される予定となっています。

河北潟では、かつてはウナギは主要な漁獲魚でした。明治45年からは、稚魚の放流も行われていました。昭和35〜37年の年平均では、約71トンの漁獲があったとされています（内灘町史）。袋網やハッタミミズを餌とする延縄漁のほか、素潜りで捕る古典的な漁もありました。現在の河北潟では、商業的な漁は行われておらず、公表されているウナギの漁獲もありませんが、ウナギがまだ生息している可能性は残っています。河北潟湖沼研究所では、河北潟の再汽水化を将来ビジョンとして掲げ、15年後の天然ウナギ漁の復活を目指して取り組んでいます。（文　高橋　久）

環境展示会「エコプロ」で活動ＰＲ

昨年12月7日～12月9日、東京ビックサイトで開催された「エコプロ2017」に参加しました。今年は、河北潟の流域全体を視野に入れ、河北潟の魅力のPRに力を入れました。河北潟の魅力を伝えると同時に、環境の変化と野生生物の減少、わたしたちの取り組みとビジョンについて、たくさんの方に説明しました。毎年ここで積極的に声を掛け、河北潟のことや、活動について伝えることで、取り組みの大事な点や課題が見えてきます。2013年から毎年出展し、今年で5年目をむかえましたが、今年は「昨年も来たよ」「前に生きもの元気米買ったよ」「レッドデータブック読んだよ」、といった方が何人も見え、スタッフみんな元気がでました。また、活動に関心をもって話を聞いてくださる方がたくさんみられました。初日は人通りが少なく、不安になりましたが、持参した「生きもの元気米」「七豊米」はほとんどなくなりました。また、今回はグリンピース・ジャパンの関根さん、理事の尾上さん、活動に関心を寄せている吉田さんがPR活動に参加くださって、活気に満ちて良かったです。

エコプロは、産業環境管理協会と日本経済新聞社の主催により、「エコプロダクツ1999」以降、毎年12月に東京ビッグサイトで開催されている環境展示会です。企業、NGO、NPO、大学等の教育機関が出展し、環境配慮型の製品や、エコなサービス、環境保全の取り組みなどを各自ブースでPRします。環境を考えた最先端の技術や仕組みや製品に注目が集まります。エコプロ運営事務局が発信する情報によると、初回の1999年は288社・団体が出展し、約4.7万人が来場、出展数最多は2008年の758社・団体で約17.3万人来場、来場者数最多は2010年で約18.3万人、745社・団体出展が記録されています。今回2017年は616社・団体、約16.0万人が来場しました。ちなみに2016年は出展企業数705社・団体、16.7万人で、最近は縮小傾向にあります。環境問題の解決には、企業やNPOや行政の連携・協働が重視されるようになりましたが、エコプロの会場では、企業、NGO・NPOのコーナーは明確に分かれ、隔たりを感じます。2018年のテーマは「SDGs時代の環境と社会、そして未来へ」、画期的な展示会が期待されます。（文：川原奈苗）

河北潟流域保全に向けて

目的

河北潟にはなかなか改善されない問題があります。その1つは水質の改善です。COD値はここ30年ほど8前後で推移しており、環境基準を達成することができていません。河北潟は流域でも最下流部にあるため、流れ込んでくる水全体の水質改善が必要です。このためには河北潟のみならず、河北潟への流入河川全体で、環境保全の取り組みが必要となります。河北潟湖沼研究所は、これまで河北潟周辺地域で様々な団体と協働しながら環境保全活動を行っています。現在、河北潟と河北潟につながる河川や水路全体を「河北潟流域」と考え、取り組みを始めています。

まずはじめに、河北潟流域の水の流れ、流域の現状把握を進めています。そしてこれらを流域にPRしてゆき、水の流れ、生活の場と河北潟とのつながり等について理解向上をはかり、流域意識を高めることを目指しています。

流域といっても山から市街地、海まで様々な環境があります。その離れた環境をつなぐしくみ、「河北潟流域」がつながるしくみとして、河北潟への水の流れをたどることのできるプログラム作りを展望しています。水の流れ、水質、歴史、環境保全活動、遊び、食事、圃場での畑作業体験等を組み入れたプログラムを目指しています。そしてこのプログラム作成を、流域全体での水辺環境保全活動を推進するきっかけとし、将来的に流域全体で水辺環境保全活動に取り組みながら、流域外の人々を呼び込むことのできるコンテンツとして完成させることを目標としています。河北潟湖沼研究所では前号で紹介した新しいビジョンとミッションを策定しましたが、その実現に向けた取り組みの一つです。

①長良川視察

プログラムづくりの参考とするため、今年度は他地域での活動事例をたくさん学んでいるところです。12月1日から3日にかけては、岐阜県長良川流域の視察に行ってきました。

はじめに木曽三川公園センターへ行き、展望タワーに上りました。タワーからは木曽三川が一望できます。タワー下の「水と緑の館」では、地域の川魚や野菜を利用した伝統料理、水害の歴史等が映像で紹介されており、人と川の関わり、川文化についてわかりやすく解説されていました。その他にアクアワールド水郷パークセンター、河川環境楽園といった施設がありましたが、どれも立派な施設で、それぞれの場所で週末ごとに環境教育プログラムが実施されているようでした。

続いて、伝統的な和舟を使った体験型のエコツアーを実施している「結の舟」代表の平工顕太郎さんを訪ね、お話を伺いました。平工さんは長良川で生業として漁師をしながら、和舟体験ツアーや川文化から生み出した商品のネット販売等をされています。

長良川は鵜飼が有名ですが、生業としての川漁師にはなかなか光が当たらず、あまり知られていません。川漁師が鮎をとる漁法は19種類もあるそうですが、これは岐阜県民でも知らない人が多いそうです。

長良川で実際に平工さんが体験ツアーを実施されている現場に行き、舟にも乗せていただきました。舟上で平工さんが長良川の川文化、歴史や、

魚、漁について適宜説明してくださり、長良川の自然を体感しながら、学びも得られるものでした。長良川の水は澄んでおり、水深2メートルの川底がきれいに見えました。ちなみにこの舟体験ツアー、決して安い価格には設定されていません。安くするのではなく、値段に見合ったものを提供することを心掛けている、とのことでした。

舟体験では櫂などの道具も伝統的なものを使い、参加者にも体験してもらっているそうです。道具に傷がつくこともあるそうですが、実際に触れてほしい、知ってもらうことが伝統文化の保全につながる、との平工さんの思いから、本物を使用しておられます。川漁師として長良川の川文化を守りながら、水辺は楽しいところだということをたくさんの人に伝えている平工さんの活動は、保全と遊びと学びが一体になっているものでした。

12月2日には長良川国際会議場で開催された「2017開門シンポジウム」に参加しました。京都

大学名誉教授・今本博建さんによる長良川河口堰に関するお話、洛東江河口汽水生態系復元協議会共同執行委員長キム・キョンチョルさんによるナクトンガン（洛東江）河口堰の開門にむけてのお話等、長良川や諫早湾・有明海の現状、韓国・洛東江での取り組み等について学びました。

そして12月3日は、長良川を実際に見て回る「現場視察」に参加しました。前日のシンポジウムで聞いたお話の現場も含めて、現地を見て回るツアーです。岐阜駅よりバスで出発し、長良川流域沿いに上流から下流まで移動しながら、過去の水害現場や、輪中、工業用水の取水場所等を見てまわりました。それぞれの場所で、今回の視察の中心となっている長良川市民学習会の方々から、治水の専門的な話や歴史的な経緯などが説明され、主催者が長良川河口堰の開門になぜ取り組んでいるのか、河口堰があることにより河川の自然環境にどのような影響があるのか等、専門的な知識のない者にもわかりやすい形で説明されていました。

環境保全活動を行っている現場をめぐりながら、歴史も交え「なぜその活動を行っているのか」、「活動を行うことでどう変化するか」を丁寧に伝えて、たくさんの学びがあるプログラムでした。今後、河北潟で環境保全活動を広めていく視察ツアーを企画する上で、こうしたプログラムの構成は大変参考になるものでした。

（文 番匠尚子）

②福島県・夏井川流域の視察

全国で流域保全に取り組んでいる組織を検索したところ、福島県を流れる夏井川で活動する団体にたどりつきました。流域の住民自らが主体的に治水、利水、河川環境の諸問題を考え、提案し、行動する団体「夏井川流域住民による川づくり連絡会」です。12月8日に代表世話人の橋本孝一さんと、世話人の佐藤雅子さんとの面談が叶い、色々とお話を伺うことができました。

お話を伺って感銘を受けたことは、①住民が川を直接確かめることが大事であるとの考えから、住民参加で水質調査を実施していること、②意識を広げるために下流域の小学校と上流域にある小学校との交流の場をつくっていること、③川で遊んでいない最近の子供たちに「一番感性のあるときに体験させないと！」との思いから、カヌーの川下りなどのイベントを実施していること、④春の総会資料に年間の事業計画が明確に打ち出されていることなどです。市役所でお話を伺った後、車で周遊いただいて、夏井川の中・下流域の様子を見ることができました。夏井川の見どころの一つに、約350年前の江戸時代に造られたという小川江筋堰があり、堤防から見ることができました。現在も使われている木材の階段型の取水堰で、河道がカーブしたところに斜めに配置されており、美しく景観にとけこんでいました。その上流側にはコハクチョウが50羽ほど羽を休めていました。餌をあげられるようになっていることは野生生物の保全の点から問題がありますが、ハクチョウの生態や注意事項が記された看板があり、住民がよく訪れ大切にされている様子が伺えました。川下りの場所や、子どもたちとウナギ捕りなどを体験する水辺を見学した後、河口に出ました。海の色がとても美しかったです。河口では砂が堆積して閉塞するなどの問題もあり、注意を向ける住民の目が大事であることを感じました。全体として子どもたちの体験学習を重視していることがとてもよく伝わってきました。

ちなみに夏井川は、福島県田村市の大滝根山に源を発し、いわき市を流れて太平洋に注ぐ、流域

面積748.6km²、河川延長67.1kmの二級河川です。流域全体を考えた夏井川の実践活動を参考に、今後の活動をすすめていきたいと思います。

③被災地の食文化を伝える活動

福島県南相馬市博物館に勤務する稲葉さんに、漁師のくらしと食文化を伝える取り組みについてお話を伺いました。豊かな海の幸に恵まれた福島県ですが、東日本大震災と原発事故による影響で、材料の調達が難しくなったり、居住が制限されたことで、郷土料理の継承が難しくなっている問題があります。念入りに現場に出向いて漁師さんに取材し、平成29年度の特別展「被災地の海を生きる」にあわせて、展示物やレシピ集がつくられました。聞き取りと実践によりつくられたレシピ集は、作ったことがない人でも料理に挑戦してみたくなるような可愛らしいイラストと分かりやすい写真でレイアウトされています。館内で展示されていた郷土料理のレプリカも実にリアルでした。河北潟では、住民が魚や貝を食べる習慣がなくなって久しいですが、食文化を守ることと環境を守ることは切っても切れない結びつきがあり、住民の魚離れが始まる以前の食を見直す活動を今後おこなっていく予定です。気合の入ったレシピ集がとても参考になります。（文：川原奈苗）

＊プログラム作りは「河北潟の水辺保全活動をすすめるための流域がつながる仕組みづくり」として、独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成を受けています。

地域交流会in河北潟の報告

11月26日、ラムネットJ共同代表の柏木氏より開会の挨拶、津幡町町長の矢田富郎氏よりご挨拶いただき、2日目の地域交流会が始まりました。

基調報告の①題目は、ラムネットＪ共同代表の呉地氏より、「なぜ水田なのか？」にはじまり、日本の湿地が減少していること、田んぼの湿地としての機能を活かすことの重要性が伝えられ、裏付けとなるデータや国際的な動向を盛り込みながら、プロジェクトを立ち上げた背景や活動内容について報告されました。②題目は、当研究所理事長の高橋より活動内容について報告しました。河北潟の環境の問題点として、ゴミ、水質、水辺で増殖した外来植物、減少する在来生物、農法による生物多様性への影響、河北潟の無関心層などについて、データを盛り込みながら紹介し、河北潟の生物と水環境を保全するために取り組んでいる活動内容と、その成果と課題について報告するとともに、新しいビジョンについてお伝えしました。③題目は、石川県立大学客員教授の上田氏より、長年調査されてきたアキアカネの生態から、農薬による影響について報告されると同時に、原風景となっている幼少期の生きものとの触れあいに着目し、未来の子供たちを危惧するとともに、生物多様性を守ることの根本的な意味を問いかけられました。

事例報告では、①河北潟干拓土地改良区事務局長の鈴木氏より、河北潟干拓地の歴史と、減反政策の中で試験田として水稲作付けが一部に開始された経緯、カモ害対策とおとり池、環境保全型農業に力を入れていることについて報告されました。つぎに②河北潟沿岸土地改良区の長原氏より、水土里ネットの取り組みと、外来種除去活動、河北潟の水辺を守り隊の活動について報告されました。水辺にはびこる外来種チクゴスズメノヒエについて、水路管理の点からの問題、生物多様性の点についても述べられ、手作業での除去活動について報告されました。③金沢市湖南公民館館長の綿村氏より、河北潟周辺の環境が大きく変化したことについて、昔の水郷の写真とともに圃場整備の記録から説明され、生きもの元気米に参加した理由と、地域の農業の問題として危惧していることが報告されました。④農事組合法人大場坊主の里代表理事の市原氏から、コシヒカリの祖先とされる「大場坊主」について紹介するとともに、子どもたちに伝統的な農法を継承する交流活動や、地元に群生していたミズアオイの保全活動、新品種ひゃくまん穀について報告されました。⑤奥能登棚田ネット協議会の田畑氏からは、能登の吉ケ池地区での耕作放棄地対策の取り組みについて、「能登の里山里海」が世界農業遺産に認定されたこと、活動による集落の変化、問題点と5年先のビジョンについて報告されました。

パネルディスカッションでは、活発な討論が繰り広げられました。ビジョンについてはしっかり議論し地域に求めていくこと、無農薬でも収量が得られる農法の確立、上流から下流の連携の在り方を考えていく、良好な地域の食文化を守り継承することなど、課題がいくつもあげられたように思います。アンケートでは、全員の方より「大変良かった」「良かった」との回答をいただき、取り組みの多様性や、津幡町での開催が高く評価されました。（文：川原奈苗）

第18回河北潟セミナー報告

9月25日（月）文京区教育委員会文化財調査員・畑山智史さんを講師にお招きし、河北潟セミナーを開催しました。河北潟沿岸部の遺跡における人類と動物の関わりをテーマに遺跡から見える昔の食生活や、江戸時代の流域の水産資源をめぐる村同士の対立等、色々なお話をしていただきました。

金腐川／魚釣り体験イベント

河北潟流入河川の上中流域の人たちに、河北潟を身近に感じてもらえるように活動をすすめていますが、その取り組みの一つとして10月7日に金沢星稜大学と協働でイベントを開催しました。内容は河北潟近くの川での魚釣り体験と河北潟に関する学習会です。川の場所によって環境が違い、魚の種類も違うこと等、実際に魚を見ながら学習できました。

ほっと石川／北陸放送

石川県の広報番組「ほっと石川」（北陸放送）の取材を受け、その様子が10月14日に放送されました。石川県の「いしかわ版里山づくりISO」に認証されている活動事例として、研究所が取り組んでいる七豊米田んぼでの活動や、外来植物除去活動等について紹介しました。研究所のいくつかのイベントで配布している「いしかわ里山ポイント」シールはこちらの制度を活用しています。

河北潟自然再生まつり2017

10月15日は気温が下がり、冷たい風が吹いていたこともあって、昨年に比べて参加者は少ない状況でしたが、色々な団体の協力によって、河北潟の自然で楽しむプログラムが展開されました。とくに午後からのセイタカアワダチソウ抜き取り大会は、体を動かす内容だったこともあって、親子が元気よく参加し、盛り上がりをみせました。3mを超えるセイタカアワダチソウを子供たちが次から次に抜き取って高さを競い、今年の一番は、388cmが記録されました。

河北潟ふれあいフェスタ

河北潟干拓地の河北潟営農公社で「河北潟ふれあいフェスタ」が開催され、当研究所も生きもの元気米の販売と活動PRに出店しました。あいにくの天気でしたが、たくさんの方が来場され、サーロインステーキ、つきたてのお餅、野菜盛りだくさんのめった汁、河北潟のおいしい農産物が集まって豊かな気持ちになりました。

水辺の外来植物除去活動

毎年恒例のチクゴスズメノヒエ除去活動、今年は11月18日に二日市地区の水路、19日に指江地区の水路、21日に河北潟干拓地の水路、25日には大場地区の水路にて実施され、手際よく大量の外来植物が水辺から取り除かれました。力のある若者に参加いただけると、地元農家さんも元気が出るみたいです。どなたでもご参加いただけますので、関心のある方はぜひ気軽にお問合せください。

植生保全活動・ヨシ刈り

11月28日に河北潟干拓地の銭五橋近くの防風林帯で、ヨシ刈りとセイタカアワダチソウの抜き取り活動を実施しました。この活動は、2016年1月より継続しており、河北潟の農地と水辺の生態系保全の活動拠点となるよう取り組んでいく予定です。刈り取りしたヨシは、ヨシ舟や葦簀づくりの材料として、ヨシであそび、ヨシを身近に利用するプログラムをすすめていきたいと思います。

編集後記

11月の田んぼ10年プロジェクトでは、津幡町長さんにご挨拶いただくことができて、嬉しかったです。ラムネットさんとの協働によって、新しい風が吹いている感じがします。(N.)

かほくがた Vol.23-3
NPO法人 河北潟湖沼研究所通信
平成30年年2月11日発行
〒929-0342 石川県河北郡津幡町北中条ナ9-9
電話076-288-5803 FAX 076-255-6941
ホームページ http://kahokugata.sakura.ne.jp
E-mail info@kahokugata.sakura.ne.jp